

たたききれない肩

20240628 ビラ朝山

洲浜 昌三

「おじいちゃんが泣いとつちやる」

子どもたちは気の毒そうに 僕の顔を見上げる

久し振りに訪ねてきたから

顔を見ただけで 涙があふれ

喜びは 呻くような泣き声になる

思い通りに手足は動かず 寝たつきりて

赤ちゃんのようにスプーンで食べさせてもらう

こんなおじいちゃんしか おまえたちには見えない

だけど 僕にはたくさんものが見えるんだよ

おじいちゃんは 小学校しか出ていない

勉強が好きで算数は人一倍得意だったけど

月に三銭の授業料料が出せなくて高等小学校の夢をあきらめ

十四のとき大工の丁稚になった

朝は暗いうちに起きて 夜は遅くまで働いた

ばやばやしてると 棟梁の鑿や金鋸が飛んできたそうだと

教えてもらうのだから 給料は無し

奉公だから 親方の家の農作業も手伝い

盆と正月にだけ 休みとお小遣いをもらって

自分の家へ帰ったそうだと

二十一歳で棟梁になり

病気で倒れるまで百件を越す家を建てた

学校や役場や公民館も建てたんだぜ…今はもうないけどね

お金はほとんど儲けなかったけど

大雪で障子が軋み柱が傾いたことはない…それが自慢だった

むかし この国に多かった職人気質っていうやつさ

学校を建てた時には予算を削られ 莫大な借金が残ったけど

こんなことをよく言ってた

「子供たちが校舎で勉強しよるんだけ…」

わら屋根にぺん草が生た小さな農家で

子供が六人もいたから障子は破れっぱなし

秋に稲を刈り取り 小作料を米で地主に納めると

次の年の夏には 食べる米がいつもなかったそうだと

「貧乏なくせに新聞をとったりして」

そんな陰口を言われたらしい

あのころ村で新聞をとっていた家は
二軒しかなかったそうだからね

地べたを這うように生きていても

きつと志は空のように高く 大きかったんだね

石見の山奥の若い大工さんが

早稲田大学の建築講義録を毎月とっていた

建築関係の難しい本が押入れに並んでいたよ

みんな 火事で焼けてしまったけど

九州の炭鉱へ出稼ぎに行った若い時には

ラブレターだって書いたんだぜ

二つ文字 牛の角文字 直ぐな文字

ゆがみ文字とぞ 君はおぼゆる

…わかるかい？さっぱりだよ

鉋屑の木っ端に墨差で書かれ

部屋へ投げ込まれていた和歌

おばあちゃんは 手に取って読んだとき

意味がわからず 長い間ひとりで悩んだそう

結婚して初めてわかったと お婆ちゃんは笑っていた

二つ文字…こ 牛の角文字…い

直ぐな文字…し ゆがみ文字…く

『徒然草』にでてくる和歌で
御嵯峨天皇の皇女が父に送った和歌だそう

— あなたを恋しく思う —

…やるね まけたよ。

酒だって一升は へっちゃらさ

米俵だって二表も担いだんだぜ

マラソンなんか得意中の得意

原爆で焼け野原の瓦礫になった広島へだって

荷車を引いて石ころだらけの道を行ったんだぜ

さあ 子どもたちよ

綿のように柔らかいその手で

おじいちゃんの肩を

思いつきり たたいておあげ

たたいてもたたいても たたききれない

かたく こったその肩を

たたきたくても たたきたくても

たたけなくなる ほそく小さな その肩を